

Gプロジェクト2011

－「Heart to ^{ハート}心」震災復興への思い－

佐々木亘, 森永初代, 濱崎千鶴, 中村民恵, 末永勝征

G Project 2011

－Heart to Heart: The Hope for Recovery from the Earthquake Disaster－

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは、学芸、情報、テキスタイル（モード部門・パッチワーク部門）、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、コミュニケーション能力の向上を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマは、東日本大震災からの復興を祈願して、「Heart to ^{ハート}心」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出を行ったかを、学生たちのレポートをもとに報告する。

Key Words: [コミュニケーション力] [プロデュース力] [グループ力] [大学祭] [震災復興への思い]

(Received September 24, 2012)

序

Gプロジェクトとは、「コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」であり、それは次の五つの柱からなる。

1. グループ活動を通して、コミュニケーション能力の育成を目指す。
2. 各プロデュースを選択することにより、個性の伸長をはかる。
3. 集団で制作・研究し、具体的な仕方で発表する。
4. 各プロデュースの教育によって、総合的な人間性を高める。
5. 特別に設けられたプログラムを活用する。

現代ビジネスコースでは、グループでのコミュニケーションを通じて集団でプロデュースする力の育成を目指し、特別にプログラムされた教科に基づき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。

*鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

この教育戦略実現のため、一年次に、「学芸プロデュース」、「情報プロデュース」、「テキストスタイルプロデュース」、「フードプロデュース」の四つのプログラムに関連する基礎的な知識・技能を学ばせる。学生は一年次の終わりに、どのプログラムが自分に適しているかを自主的に選択する。二年次では、それぞれのプロデュースにおいて、共同で制作活動に着手し、大学祭では、公の場でのプレゼンテーションに取り組む。また、卒業後もその成果を後輩の学習教材となるようデジタルアーカイブ化している。

今回は、震災復興への思いを学生一人ひとりが共有し、各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと着手した。「情報プロデュース」では、「笑顔」をテーマに、電子媒体を通じて多方面の活動を記録し、三部構成の舞台発表では第一部での3分間のオープニング映像でGプロジェクトを総合的に印象づけた。「学芸プロデュース」では「絆」をテーマに友情の大切さを動く絵本で表現し、発表の第二部を担当。「テキストスタイルプロデュース」は「感謝」をテーマに、モード部門では、ドレス制作を通して表現力を養い、それぞれが協力して統一感を持った舞台の第三部を演出した。また、パッチワーク部門では、個人制作と共同制作を行い、大学祭での展示を行った。「フードプロデュース」では、「まごころ」をテーマに、大学祭で「アップルパイ」と「クッキー」の制作と販売を行うと同時に、「Gカフェ」を運営し、1・2年生が一致協力して、憩いの空間作りに取り組んだ。

本報告は、2011年度に行われた“Gプロジェクト”の内容に関する情報発信を意図している。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告を一つの反省材料として、さらなる発展を模索していくことになる。

I. 「Heart to ^{ハート}心」について

2011年度大学祭全体のテーマは「輝け☆マドンナブルー～1人ひとりの願いを込めて～」である。現代ビジネスコースでは、この「願い」という点に着目して、コーステーマを「Heart to ^{ハート}心」とした。その経緯について、まず報告する。

2011年3月11日に世界中を震撼させた東日本大震災が起こった。被災地となった地域では、地震と津波によって多くの方が亡くなられ、いまなお行方不明の方も少なくない。目を疑いたくなるような映像に、世界中が大きな悲しみに包まれた。そんな中、日本を応援してくれる世界中の多くの人々から、あたたかい支援を受けることができた。被災地では、復興に向けて、被災された方々と支援する側が協力し合いながら、さまざまな活動に励んでいる。

私たちの心も大きく揺り動かされた。震災復興にむけて「今、微力ながらも私たちにもできることはないのだろうか」と考え、純心で学んできた私たちだからできることを、学生一人ひとりが取り組めることを実行しようという思いのもと、2011年度大学祭のテーマは「輝け☆マドンナブルー～1人ひとりの願いを込めて～」になった。

大学全体のテーマを踏まえて、現代ビジネスコースのテーマを全員で考えた。このコースの特徴である学生数が多いこと、チームワークを大切にしている集団であるということから、テーマは「Heart to ^{ハート}心」に決定した。「Heart to ^{ハート}心」には、現代ビジネスコースに所属している学生同士はもちろんのこと、先生方や卒業された先輩方とも一人ひとりが手を合わせ、顔を見合わ

せ、心と心を重ね合せようという思いが込められている。成功も失敗も心から分かち合えるように全員で向き合い、大学祭へ向けての準備等を進めていけたら、どんなに良いであろうか。

震災発生後、メディアから流れる情報から、私自身もたくさんのことを考えさせられた。特に避難所での生活では、プライバシーはまったくない状況である。その様子からも、相手に対する思いやりや、人と人とがしっかりと向き合い励まし合うことがいかに大切であるかを考えるようになった。また、今年20歳という節目の年にあたる私たちだからこそ伝えられることは何か。東日本大震災の復興にむけて、今、自分たちが大切にしたい思いをテーマに選んだのである。(阿久根美希)

Ⅱ. 情報プロデュース

情報プロデュースの2011年度の選択者は8名であった。大学祭で、コースの特色やその魅力を少しでも紹介できるように、前期から各プロデュースの活動を映像として記録し、大学祭で発表した。この取り組み状況については、リーダーを務めた船蔵杏の報告を参照されたい。

一方で、4月に行われた体育祭での「総合優勝」をきっかけに、「情プロ新聞」を発行することになった。この優勝は、現代ビジネスコース4年目にして初の快挙であった。短大生活は、2年間と短く、1年生と2年生で情報を共有する時間も限られている。授業以外の学内外におけるさまざまな行事において、1年生にとっては初めての経験となり、2年生は1年生を指導する立場となる。しかし、引継ぎする時間も取れず、毎年、教員はその指導に多くの時間を割くことになっている。そこで、新聞を作成し、情報を共有することができれば、活動への理解も早いと考えた。

学校行事やコースの活動ごとに担当を決め、各担当者が行事ごとに一人ずつ新聞作成を行うことにした。各担当者がMacのアプリケーションであるPagesでそれぞれの行事に合わせて新聞を作成した結果、書式もばらばらで統一性がなくなってしまった。「初めて」の行事を担当する学生は、何を伝えるべきかを理解できていない場合もあるため、完成までに多くの時間を要したのである。それでも、各担当者がそれぞれの行事ごとに完成させた新聞の一部は大学祭で展示することができた。卒業生には懐かしく、その他の来場者には現代ビジネスコースの活動を周知できたのではないだろうか。

最後にファイルサイズの最適化や、書式と表現を統一させるため、一人の学生にそれぞれの新聞をチェックさせ、PDF加工と最終確認を行った。新聞が完成したのは2月であった。次年度以降も継続し、本年度の反省をふまえ、学生がより効率よく作業できるよう指導したいと考えている。

この取り組みを通して、仕事を分担する上で重要なことは、最初に何らかのルールを決めることであると学生たちも理解できたようである。ルールを徹底させ、進行状況を確認することがリーダーの役割である。また、課題を遂行する上で問題があれば、相談を受けるのが教員の役割であるということを再認識させられた。(森永初代)

情報プロデュースは、パソコンスキルの向上を目指し、年間を通してWindowsやMacの

機能について勉強し、実践的に活用する方法を学んできた。大学祭では、「発表部門」と「展示部門」の二つの部門で、活動成果の発表を行う。情報プロデュースの活動の中心となる「発表部門」では、大学祭で上映する映像の制作を担当する。舞台発表のスタートを飾るオープニング、浴衣による作品ショーの背景、発表を締めくくるとエンドロールの三つの映像である。

制作にあたり、情報プロデュースでは「笑顔」というテーマを設定した。人の心と心を繋ぐのは「感謝」の気持ち、そして一人ひとりが抱く「まごころ」、そこから生まれるのが「絆」、その全ては「笑顔」から生まれると私たちは考えた。現代ビジネスコースは人数が多く、賑やかで笑顔溢れるコースである。学生最後の思い出としてその笑顔を映像で形に残すため、このテーマを選んだ。作品を通して、現代ビジネスコースの特色や魅力を紹介すると同時に、各プロデュースのテーマである「感謝」、「まごころ」、「絆」、そして「笑顔」を映像全体で表現することを目標に掲げ活動に励んだ。

最も時間と労力を費やしたのはオープニング映像の制作である。構成の検討、撮影、編集は昨年までの作品を参考にしながら互いに案を出し合い、試行錯誤を繰り返した。

私たちは「Heart to ^{ハート}心」に込められた「一人ひとりの心と心とを繋ぐ」という思いから、撮影した一つの動画を別々のものではなく、流れるように繋がる一つの映像として仕上げたいと考えた。そのため、動画や写真によって明度や彩度、撮り方にムラがあってはならない。ビデオカメラやデジタルカメラでの撮影に慣れていない私たちは、事前にテスト撮影を何度か行った。光を調整するためにレフ板を使用し、角度を変えて撮影することで、思い描いていた以上にいい動画を集めることもできた。

約3分間のオープニング映像に対して、膨大な量の動画と写真を素材として集めた。限られた時間に収めるために、撮影した動画や写真の加工、編集をMacのアプリケーションで行った。動画の加工や編集には動画作成アプリケーションのiMovieを使用した。iMovieの操作はシンプルで、パソコンに動画を取り込み、追加したいエフェクト（効果）を挿入するだけで本格的な映像を作ることができる。

動画に挿入する音楽作成には、GarageBandを使用した。GarageBandに付属しているApple Loopsには、プロが録音した1,000以上の短い演奏が入っている。アップテンポで爽快感のあるサウンドを選んだ。これに、iTunesで購入したスウィング・ジャ



図1 撮影風景



図2 iMovieでの編集



図3 プロデュース紹介

ズの代表曲「Sing Sing Sing」を追加し、躍動感を与える音楽が作成できた。また、iMovieのトランジション（変化の効果）を利用することで、動画の繋ぎ目に不自然さを感じさせないように編集した。

リハーサル段階で「昨年までの作品から発展した部分はどこか」と質問された。この指摘に、自分たちらしさに欠けていることを気づかされた。そこで私たちは、作品の最初と最後、各プロデュースを紹介するシーンにKeynoteのファイルを付け加えることにした。Keynoteで作成したデータをQuickTimeムービーに書き出し、映像に挿入。Keynoteはプレゼンテーション用のアプリケーションソフトであり、アニメーション効果でテキストやオブジェクトに動きを付け、メッセージをより効果的に映し出す。商品や制作した作品等プロデュースごとの特色がわかる写真を使用するとともに、プロデュース名の背景には私たちが考えたそれぞれのイメージ色の大きなハート^{ハート}を用いて、ビジュアル的に「Heart to 心」を表現した。また、オープニングの最後にインパクトを残すため、笑顔の写真を次々と出現させ、大きなハートを作り上げるというモザイクアートも取り入れた。

リハーサルを繰り返すたびに、厳しくも的確な指摘を受けた。自分たちが伝えたいメッセージやコンセプトは曲げずに、改善すべき点だけを改善していかなければならない。削るところは削り、残すところは残すという取捨選択に頭を悩ませた。葛藤もあったが、動画の順番を入れ替えたり、使用する効果を変更したりした結果、作品全体をコンパクトにまとめることができた。これは最後まで、発表部門に携わった全員が、妥協せずよりよい作品に仕上げたいという気持ちを共有できたからである。



図4 モザイクアート

大学祭で上映する3分間の作品には、私たちの多くの時間と労力が注ぎ込まれている。大学祭までの約1ヶ月間で、自らの計画性と責任感の無さを痛感するとともに、大学祭という一つのイベントを成功させることの大変さを知った。8人という少人数で活動している情報プロデュースでは、役割分担が不可欠である。分担することで作業を効率的に進めることができたが、作業の比重が大きかった動画の撮影・編集の担当者に負担が掛かってしまったことが反省点として挙げられる。

作業ごとに責任者を決め活動をスムーズにすることは必要だが、報告・連絡・相談を絶えず行うことで全員が目的や進捗状況を共通理解することがプロジェクトを成功させる最も重要な鍵となる。また、失敗から学び、よりよいものへと成長を遂げる達成感を知り、同じ目標に向かって協力し合うことで芽生える“絆”を実感した。大学祭までの取り組みを通して、「Heart to 心^{ハート}」の精神は私たちの中に浸透しつつある。心と心を繋ぐキーワードでもある「感謝」「まごころ」「絆」「笑顔」を大切に、これからも「Heart to 心^{ハート}」の輪を広げたい。(船蔵杏)

Ⅲ. 学芸プロデュース

学芸プロデュースでは、共同研究として大学祭での発表を目指し、「動く絵本作り」に取り組んだ。2010年度は、西洋や日本の物語を組み合わせアレンジした、「Fantasy Hyper Mix～あるお姫様の物語～」である。背景にインターネット検索で見つけた画像を使用し、その上にオリジナルのキャラクターを貼り合わせて画像を作成し、物語の内容は学生が朗読する形式であった。

これに対して、2011年度は、背景も入れて作画を形成し、台詞は録音して画像と一体化させるという、まったく新しい方法で取り組んだ。しかも、学芸編とバドミントン編の二本立てという内容である。

学生自らが非常に積極的かつ主体的に取り組んだ結果、「絆～みんなで奏でるハーモニー～」という動く絵本は無事完成し、大学祭2日目の2011年10月23日(日)に、大勢の観客の前で発表することができた。いろいろな反響もあり、それなりに好評を博したと考えている。学生たちも、手ごたえを感じたようである。(佐々木亘)

学芸プロデュースは、大学祭で発表する動く絵本を作成した。2011年度は、私たちにしか表現できない新しさを持った動く絵本を目指すために、私たち独自のスタイルでの発表ができるように発案をした。

まず、私たちの制作過程を簡単に紹介した学芸編と、スポーツを通じて大切なものを知る物語のバドミントン編の二部構成で発表することに決定した。二部構成にすることで、より斬新になり、観客に興味を持っていただけたと考えたのである。



図5 学芸編



図6 バドミントン編

学芸編とバドミントン編の内容の共通点として、私たちは一人では生きていけないこと、多くの人に支えられていることが挙げられる。この動く絵本を通して、多くの人に支えられていることを感じてもらい、「絆」の大切さを少しでも多くの人に伝えることが私たちの役目でもある。より多くの人に伝えるためにも、物語の内容だけでなく、描画に関しても力を入れた。キャラクターを一から考えて、場面に合わせた表情や表現方法を見つけることは、とても難しかった。しかし、みんなで多くの意見を出し合いながら考えることで、個性豊かなキャラクターを完成させることができた。

また、過去3回の大学祭の学芸プロデュースでの舞台発表方法は、一人のナレーターが舞台上で、学芸プロデュースの紹介と発表作品である動く絵本の説明、そして動く絵本の物語を始めから終わりまで朗読するという方法をとっていた。これに対し、2011年度は、背景も入れた作画を形成し、パソコンに取り込んで音声と一体化させた。というのも、動く絵本のストーリーの大筋を決定した段階で、その発表形式では問題が発生したからである。

作中には、多くの登場人物が必要となるため、例年のように一人のナレーターがすべてを朗読してしまうと、登場人物ごとの特徴や感情表現が困難になる。そこで、私たちはキャラクターごとにキャストを決めることにした。発表する動く絵本の登場人物のセリフを前もって録音し、そのデータを焼いたCDを舞台発表の時に流すことで、登場人物の特徴や感情を豊かに表現することができる。バドミントン編では、スペシャルゲストとして中村伸一郎先生に監督役をお願いし、より充実した感情表現をすることができた。

初めて挑戦したこともあり、苦勞したことが多々あった。大学祭2週間前のリハーサルを通し、実際に大講義室で聞いてみると、声のムラが気になった。編集をしている際、パソコン室ではあまり気にならなかったが、大講義室は広いので、声は響き、雑音なども目立ってしまった。みんな完成間近と思っていたため、この時点での録音のやり直しは大変焦りを感じた。しかし、より良いものを作るためにも、みんなで都合が合う時に何回か録音を繰り返し、以前よりマイクに近づけて大きな声で話すなど工夫した。

また、音声だけでなくシナリオの構成順序も考え直した。バドミントン編を二分割して、その間に学芸編を挿入していたが、内容が伝わりにくかったのである。そこで、私たちは、学芸編、バドミントン編という順序に変え、シナリオを簡潔にした。何度も修正することで、自分たちの意識も高まり、よりよいものを目指すようになった。そして、最終リハーサルを行い、先生方のチェックも受け、本番に臨む態勢が整った。

みんなで協力して作り上げた「絆～みんなで奏でるハーモニー～」を大学祭で発表するときは、とても緊張した。しかし、自分たちで作成した作品にお客様からの反応があったときは、みんなで協力して頑張った甲斐があったとしみじみ感じた。

この学芸プロデュースの共同研究は、動く絵本の作成を通して、みんなで協力して一つの作品を作り上げることが目標だ。動く絵本を作成して、チームワークの大切さを改めて感じることで、完成したときの達成感を全員で味わうことができた。これから、それぞれの道へ進んでいくが、この作品を通して学んだように、周りに支えられ



図7 音声と画像位置の編集



図8 動く絵本の最終ページ

ていることを忘れずに、人とのつながりを大切に生活していきたい。

現代ビジネスコースの大学祭のテーマである「Heart to ^{ハート}心」に合わせ、学芸プロデュースでは、「絆～みんなで奏でるハーモニー～」をテーマにした。絆の他にも「Heart to ^{ハート}心」に関連する言葉や、今年の出来事や感じたことをみんなで考えた。感謝の心、友情の大切さ、協力すること、思いやりの必要性、仲間との繋がりなど、多くの意見が挙げられた。これらは、これから生きていく上で、とても重要な要素だ。私たちは、「絆」ということをテーマにし、周りに支えられていること、自分は一人ではないということを描く絵本で表現しようと努めた。この動く絵本を通して、自分自身と向き合う勇気や絆の大切さについて、あらためて考えさせられた。(長谷なおみ)

Ⅳ. テキスタイルプロデュース (モード)

2011年3月11日に起こった東日本大震災を通して、学生たちは復興に向け「微力ながらも自分たちにできることはないだろうか」と考え、Gプロジェクトのテーマが生まれた。阿久根の報告にもあるように、一つのプロジェクトを成功させるために一人ひとりが手を合わせ、顔を見合わせ、心と心を重ね合わせようという思いをテキスタイルプロデュースのテーマ「感謝」に込めて、作品の制作に取り組んだ。

作品の制作工程の前半は、デザインを決定し、仮縫いまでは同じであるが、後半はそれぞれ異なるため、個々の取り組み状況によって個人差が出た。学生たちは夏休み期間を有効に活用する予定だったようだが計画通りには進まず、制作工程を一部変更することとなった。この間の活動に関しては、発表部門の総合プロデューサーである阿久根とモード部門のリーダーである山下に責任を持たせていた。この2名はお互いに協力しながら準備を進めていたが、それ以外の選択者は自分自身のドレス制作のことで手一杯で、周りのことを考える余裕はなかった。

このような背景から、2010年度まではドレスのアンダーに着用するパニエも手作りさせていたが、この工程を省くことにし、ネットショッピングでそれぞれのデザインに合った比較的安価なパニエを購入することとした。ただ、パニエはドレスのシルエットに影響を与えるため、不足する部分を手作業で補わせた。

また、2010年度の反省を踏まえ、舞台発表の準備を選択者全員で分担したが、リーダーが全体を把握できていない状況に陥っていった。リーダーとしてそれぞれに役割を分担したことで、強いリーダーシップと報告・連絡・相談の重要性を痛感したと、阿久根も山下も報告している。

舞台構成については、一人の女性の成長過程を全体の柱に「感謝」をいかに表現するかである。一つのプロジェクトを完成させるために、心を通い合わせるために、話し合い＝ミーティングは必要不可欠。一人ひとりが手を合わせ、顔を見合わせ、心と心と向き合わせるために、話し合い＝ミーティングをすることの重要性・必要性を、学生の活動を通してあらためて実感させられた。(中村民恵)

テキスタイルプロデュース (モード部門) 選択者は23名での活動となった。今年は20歳という人生の節目でもあり、今までにお世話になった方々に日ごろの感謝の気持ちを伝えたいとい

う思いから「感謝」というテーマを設定した。2011年度の舞台発表第三部作品ショーで工夫した点の一つが、出演者全員で一人の女性の成長段階を表現したことだ。そしてもう一つは、自分達が持っているイメージを作品ショーに生かしたことである。

舞台構成として、大裁女物単衣長着からパステルカラーのドレスにつなぐために、妖精のような優しいイメージを持てるようにした。次に透明感のある明るいドレスで聡明さを表現し、見ている方々に元気を与えられるよう満面の笑顔を心がけた。続けて、ビビットなカラードレスで活発な女性をイメージし、パステルカラーのドレスで落ち着いた女性の美しさ、心の成長を表現した。ダーク系のドレスでは、気品あふれる女性の姿、そして、女性として最も輝く白をベースにしたドレスで清楚な女性をイメージ。最後は存在感のあるデザインと色のドレスで、自立した女性を表現し、舞台発表全体をまとめた。

2010年度までの演出はウエディング色でもあるホワイト系のドレスを舞台発表の終わりにもってきた。しかし、2011年度は演出を一新し、カラードレスで最後を締めくくった。音楽はドレスのイメージや表現する内容を踏まえて選曲を行った。

○制作工程

1. オリジナルデザインの決定
2. 型紙制作（身ごろ、スカート）
3. シーチングでの仮縫い
4. 布地の注文 印しつけ 裁断 仮縫い
5. 本縫い 身ごろ部分
6. 本縫い スカート部分

シーチングを用いて、ドレスのデザインを確認する工程において、個々のデザインの違いから制作スピードに差が出てきた。フリルを用いたデザインのドレスは時間がかかってしまうことから、各自が計画を立て、休み時間や空きコマを有効に活用するべきであった。



図9 布地選び

○身ごろの制作

1. 身ごろ補正
2. 身ごろの本縫い・見返し付け
3. 見ごろの部分完成

8月に入り夏休み期間となった。しかし、前期中に夏休みは制作活動のため、アルバイトや旅行の予定はあまり入れないようにと伝えていたが、ほとんどの選択者が夏休み期間中を有効に活用することができなかった。そのため、制作工程の一部を変更することとなった。変更点はドレスのスカートにふくらみやボリュームを持たせるためにパニエを着用するが、その制作まで手がまわらず、全員が安価な市販のパニエを購入した。2010年度までの先輩方は自分たちでパニエまでも制作に取り組んでいたが、今回自分たちの計画性の無さから妥協することとなった。制作工



図10 身ごろの制作

程を一部変更したにもかかわらず、2010年度と比べ、制作スピードが遅く、自分たちの計画性の無さ、認識の甘さ、自覚の足りなさを痛感した。

後期は、前期よりも空きコマ・放課後の時間に余裕ができたため、制作活動の時間が増えた。一部の選択者は7時30分には登校して制作活動を進めた。私にとっても朝の時間は貴重な時間であった。この時間の使い方が、制作活動における個人差にもつながったと言える。

制作中のドレスのイメージが完成に近づいてきた頃から、舞台構成に取り組んだ。構成は一人の女性の成長過程を全体の柱とし、今回のテキスタイルプロデュースのテーマである、「感謝」を表現しようと決めた。

今回は舞台発表の準備にかかる「音響・原稿・招待状・展示」などを分担しすぎたために、リーダーである自分たちが全体を把握できていないことに気づかされた。それぞれの係がいつ活動するかなどのスケジュールをしっかりと把握しておくべきだったと反省している。この経験からリーダーとして、作業計画をしっかりと確認すること、声を掛け合うこと、途中経過をしっかりと把握すること、できあがったら報告してもらい、先生方に確認することが大事であり、報告・連絡・相談の重要性を痛感した。

10月に入り、練習やりハーサルの回数も多く重ねた。その中で、先生方から厳しい指導をいただき、悔しい思いをしたことは今でも忘れることができない。この時の厳しい指導と悔しい思いがあったからこそ、全員で練習と改善を重ね、舞台を完成させることができたのである。

本番の朝は7時30分に集合した。化粧やヘアセットなどを自分たちで準備した。準備にはアシスタントの1・2年生や卒業生が手伝いに駆けつけて下さった。私たちの舞台発表のために、本当にたくさんの方々が支えてくださっていると実感した。

本番前になると出演者全員が緊張していたので、ご覧くださるお客様に今の気持ちを伝えられるように声をかけた。本番では、全員の緊張が

ピークに達し、裾を踏んだり、笑顔が引きつったり、曲に合わせることができなかった。私自身も笑顔がひきつっていることが自覚できた。自分が作ったドレスをプロデュースするために、舞台に立つのだから、制作のときと同じように舞台練習をもっと一生懸命、毎日練習をするべきであった。ただ作って、着て、舞台を歩いて見せるだけでは、わざわざ見に来ていただいたお客様に感動を与えることはできないのだと痛感した。しかし、フィナーレで会場の階段を下りているとき見渡すと、たくさんの方で会場がいっぱいになっていた。

私たちが、6ヶ月間かけて、一生懸命、本気で取り組んだドレス制作や舞台を見に来てくださっていると思うと、リーダーをやってよかったと思った。今までの辛かったことや悔しかったこともすべて頭から消えてしまった。ドレス制作はもちろん、リーダーとして苦しく辛いこともあったが、友人の支えや両親の協力があってこそ乗り越えられたと思う。これからも「感謝」を私の永遠のテーマとし、この気持ちを大切にしていきたい。(山下敦紀)



図11 舞台発表当日

V. テキスタイルプロデュース（パッチワーク）

テキスタイルプロデュース（パッチワーク部門）では、2011年度も個人作品と共同作品を制作し大学祭展示部門の会場で展示を行った。2010年度に比べ、2011年度は選択者が多かったため、自分のペースで作業しつつもお互いに進行状況を確認し、また励まし声を掛け合いながら作業を進めることができていた。

個人作品ではそれぞれの思い「感謝・優しさ・安らぎ・温かさ・明るさ・かわいさ・思い出」などを込めて制作した。デザインを考え、そのデザインに合わせて配色し、その色に合わせて布選びを行う。自分の思いを「言葉」ではなく「布」を用いて相手に伝えることは本当に難しい。しかしその反面、楽しくもある。そのことに気づくと同時に完成したときの達成感も大きかったのではないだろうか。完成した作品の大きさはそれぞれであるが、自分の思いを伝えるために、基本の技法に自分なりの工夫をプラスすることで、自分らしさを表現できていた。

共同作品においては、テキスタイルプロデュースのテーマが「感謝」だったので、感謝を表すモチーフとして「ハート」を選んだ。表現の仕方としては、基本の六角形を用い、色はピンク系とした。各自裁断してきた布を試行錯誤しながら配置を考える過程を通して、1枚の布の場所を変えるだけで受ける印象が違うことを実感していたようである。縫い合わせからキルティング、そして仕上げまでは、個人作品が終わった学生たちから取りかかったため、携わる度合いに差があったので、工夫が必要であると感じた。中心になって活動していた学生に、多少なりとも負担がかかっていたようである。実際の展示に関しては、作品の一つ一つにコメントをつけることで、見てくださる方に作品に対する作り手の思いがより一層伝わったと感じている。

一年間の活動を通して、学生は一から自分で考え、物をつくることの大変さと楽しさ、そして自分が動かなければ先には進まないということを実感したのではないだろうか。これらの活動を通して学んだことを、今後経験するであろう多くの場面で活かし行動できることを期待したい。（濱崎千鶴）

□個人制作

どの作品も個性が出ている作品となった。カラフルなものから同系色でまとめたものなど、配色においてもそれぞれの個性が光ったと思う。作品にはタペストリーが多かったが、エプロンやクッション、ポーチ類などの実用的な小物もいくつかあった。展示する際、作品の下部にその作品に対するそれぞれの思いを書いた紙を掲示することで、作品を見に来てくださった方々に自分たちの思いが伝わったのではないだろうか。

□共同制作

共同制作は「ハートの壁掛け」と「シュシュ」である。2011年3月に起こった東日本大震災



図12 個人作品

を通し、人と人との絆が重視され、繋がりが大切にされてきた。2011年度の大学祭の、現代ビジネスコースのテーマは「Heart to ^{ハート}心」、テキスタイルプロデュースのテーマは「感謝」とした。これに沿い、ハートをモチーフとした壁掛けを作成した。みんなの布を繋ぎ合せて作ることで、絆や友情の大切さを表現した。

○ハートの壁掛けの制作過程

パッチワークのイメージカラーがピンクと決められていたため、ピンク系の布を使ってまとめた。使用した布は全部で98枚である。六角形の型紙を作り、それに合わせて布を切った。布は一人7枚で、パッチワーク選択者全員が各自で持ち寄った。布の裁断からキルティングの作業にいたるまで、全員が何らかの形で携わることができた。

制作を始めたのは9月末からだ。9月16日にデザインを決め、ピンク系の布を使うことをみんなに伝えて、その日に裁断を開始した。布がそろったのは9月26日だった。時間がなかったため、その日のうちに布の配置も決めた。デザインを描いた用紙に、実際に一辺が3.5センチの六角形を書き、それぞれに番号をふった。その上に布を並べ、布の裏に番号をふって配置を決定した。

縫い始めは9月30日。縫う過程を詳しく述べると、最初に横一列を縫い合わせた後、上下を繋ぎ合わせた。全部を繋ぎ合せた後はキルティングを行った。キルティングとは、表布と裏布の間に綿をはさみ、上から縫う作業のことをいう。キルティングをすることで、パーツごとに立体感が生まれる。今回はでき上がったトップと裏地の間に綿をはさみ、六角形の縫い目に沿ってキルティングをした。キルティングは同時に複数の人数で行うとつってしまうので、基本的に一人で行った。そのため、一人が少し縫って交代するやり方で進めた。その後、型紙に合わせて縫い合わせた一枚の布をハートの形に切り、ふちをバイアステープでくるむ作業に入った。この作業は同時に複数で行うことができたため、早く進んだ。全ての作業は個人制作が終わった人から取り組み始めた。壁掛けが完成したのは10月20日である。



図13 完成したハートの壁掛け



図14 布の配置



図15 縫い合わせ



図16 バイアステープで縫う作業

○シュシュの制作過程

シュシュは10月7日に布を買いに行き、制作を開始した。当初は共同制作でシュシュを作ることは考えていなかったが、みんなが同じシュシュをつけ気持ちを一つにするために作った。大学祭で現代ビジネスコースの絆を発揮できたのではないかと考える。

シュシュ制作もハートの壁掛けと同様に、個人制作が終わったものから取り組んだ。作成個数は、現代ビジネスコース2年生の分が約80個、大学祭へ来てくださった方への感謝の気持ちとして贈る50個の計130個である。



図17 完成したシュシュ

□制作を通して

小さな布一つ一つを縫い合わせて繋げる細かな作業は、本当に大変で根気のいる作業であった。しかし、みんなで協力して作業を進めるうちに、始めは小さな布だったものがどんどん繋がっていき、少しずつ大きくなっていくことで、完成が待ち遠しくなり、楽しみながら作業をすることができた。実際に壁掛けが完成すると、達成感があり、自分一人で作ったものでなく、みんなで協力して作り上げたものということで、喜びは何倍も大きかった。制作を通して新たな繋がりができ、真の絆を感じることができた。(砂坂美帆)

IV. フードプロデュース

フードプロデュースでは、鹿児島島の食を学ぶとともに、大学祭では「まごころ」をテーマとし、2011年度大学祭も食品販売部門の中で、Gカフェの運営、アップルパイ、クッキーの制作販売を行った。アップルパイ制作は授業内で行ったが、Gカフェ、クッキーの試作・制作は授業外で行った。

Gカフェ、クッキーにおいては、新商品を出すために試作を繰り返し、フードプロデュースの選択者、先生方の意見を伺いながら販売商品を絞り込んでいった。Gカフェ、クッキーも同様であるが、特にアップルパイは東日本大震災の復興のために少しでも多く寄付ができればと思い、これまでの販売金額を900円から1,000円に値上げした。直接被災地に行けなくても、その思いは伝わっているはずである。学生たちもそう信じて、自分たちのできることを、やるべきことをまごころ込めて行動に移していたのではないだろうか。

同じ目標、方向に向かって進んでいくためには、心をひとつにすることが大切である。しかし制作過程の中で意見のくい違い等により、うまくかみ合わず、心がすれ違うことも多々あったようである。そんな中であっても試作の段階から大学祭当日の販売に至るまで、まごころ込めて各自の作業に携わっていることが見てとれた。

大学祭を成功に導くためには、授業での実習においても、積極性、協調性や柔軟性が大変必要であることを学生たちは実感できたのではないだろうか。自分で考え、その考えを相手に伝える。そして協力してものにしていく。困難なことはいくらでもあるが、それをどのように乗

り越えていくのか、大学祭という一つの活動を通して学んだことはたくさんあるはずである。このことをこれからどのように活かすかは、学生一人ひとりに任せられている。卒業後の学生の成長を期待したい。(濱崎千鶴)

フードプロデュースでは、一年間を通して鹿児島の食について学び、実際に調理をすることで鹿児島の食文化に親しみを持つと同時に、大学祭で自分たちが一から作り上げた作品を商品として販売・提供した。大学祭では、1年生の作品としてクッキー、2年生の作品としてアップルパイ、コース全体の作品としてGカフェでコーヒーやスープ等の販売・提供を行った。

2011年度のコーステーマは、心同士で向き合うことができるように「Heart to Heart^{ハート}」に決定し、フードプロデュースでは、「まごころ」をテーマに、それぞれ4月から試作に取り掛かった。10月の大学祭までの約半年間、活動を通して大変なことや失敗も多くあったが、フードプロデュース選択者全員で助け合い、当日は無事に大学祭を成功させることができた。

□販売した商品について

まず、販売した商品について簡単ではあるが、説明していきたい。

○クッキー

7月までに、バナナ、マロン、コーヒーなど計22種類のクッキーの試作を4回行った。その結果、販売する商品として決定したのは、2010年度先輩が考案した抹茶・アールグレイ・ココナツの3種類と、2011年度私たちが試行錯誤の末選んだ、チョコチップ・レモン・アーモンドココアの3種類である。

12個入り100円で販売し、2日間とも30分ほどで完売することができた。また、抹茶とココナツは作成の際、他のクッキーよりも多く作ることができたので、Gカフェの「おまけ」として、飲み物と一緒に提供した。

○アップルパイ

現代ビジネスコースのアップルパイは、本学の初代学長酒井ミヤ子先生がアメリカに留学中にアップルパイの作り方を習得し、帰国後、シスターや学生たちに伝授されたものである。

今回は、東日本大震災で被災された方々に1円でも多くの義援金を寄付できるようにと、価格を900円から1,000円に上げた。また、今まで、コースのアップルパイは伝統的に紅玉を使用していたが、紅玉より安いジョナゴールドを使用することを決定し、りんごは青森産を使用することにした。作る際、ジョナゴールドを使用し、紅玉と同等の味とおいしさを出すために試行錯誤を繰り返した。当日は販売前から行列ができ、約15分で完売することができた。



図18 販売用クッキー



図19 販売用アップルパイ

○Gカフェ

Gカフェは、6回の試作を通して約17種類の試作をし、今までになかったアイズドリンクやスープの販売も行った。2011年度の新商品として私たちがおすすめしていたものは、アイズドリンクの「カフェゼリー」である。ゼリーの甘さやカフェオレの濃さなどはフードプロデュース選択者の意見だけでなく、キャンパス見学会に参加した高校生にもアンケートをとり、調整を行った。最終的に5ヶ月間の試行錯誤を経て、全員が満足できる商品に仕上がった。当日はたくさんのお客様に足を運んでいただき、私たちも大きな達成感を感じることができた。



図20 カフェゼリー

□振り返り

大学祭までの7ヶ月間でさまざまな経験をしたが、一つの大きな失敗としてアップルパイのパッケージに載せた「Heart to ^{ハート}心」の文字が間違っていたことがあげられる。アップルパイは一年次のインターンシップ先に贈答するものであり、プリントミスに気づいたのは贈答後のことであった。これを通して、一つひとつ確実に見直し、確認することの大切さを学ぶことができた。

今回、フードプロデュースの大学祭での利益は下記の通りである。どの部門も純利益がプラスになったため、全員が達成感を味わうことができた。

大学祭総売上（単位：円）

	材料費	総利益	純利益
クッキー	33,633	62,750	29,117
アップルパイ	55,845	70,000	14,155
Gカフェ	92,408	196,500	104,092
合計	181,886	329,250	147,369

大学祭では多くのお客様に足を運んでいただいた。大学祭までの約半年間の中で、トラブルが起きた場合でも臨機応変に対応することができる柔軟性と仲間と助け合いながら作品を作っていくうえで協調性を身につけることができた。これからの日常生活でも柔軟性や協調性は必要である。今回の大学祭でリーダーを務めたことで、自分自身大きく成長することができたと思う。（若松香那）

結 び

今回、「Gプロジェクト」を通じて、学生が多くの困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。学生たちは、自分たちで設定したテーマや目標の実現に向け、さまざまな苦労を体験した。この点、舞台発表部門の総合プロ

デューサーを務めた阿久根美希は次のように報告している。

大学祭での舞台発表までのプロセスにおいて、大勢の人数を一つにまとめること、計画したことを実際に計画的に取り組むことの難しさを痛感した。細かな報告・連絡・相談が必要とされていたのに、他の役割を理由に細かな報告・連絡・相談を各プロデュース責任者同士で行うことができなかった。その結果として、提出期限のある資料が提出されないなどの数多くの失敗を重ねてしまった。報告・連絡・相談は組織に所属している一人の人間として必要なことであり、これから社会に出る私たちに必要不可欠な要素である。また、計画を立てて行動しなければいけないが、状況の変化に柔軟に対応できる能力も欠かせない。常に先読みができる余裕が私にはなかった。発表部門の総合プロデューサーとして、多くの方々に迷惑をかけながらも2011年度の舞台発表を成功させることができたのは、いつも陰ながら支えてくれていた仲間が存在があったからだ。とても苦しい6ヶ月間ではあったが、今までに経験したことのない責任と重圧を乗り越えることができたことは、私にとって大きな経験である。常に「感謝」の気持ちを忘れず、大学祭で学んだことをこれからの人生の糧にしていきたい。

私たち教員は、学生たちに多くの課題が残ったとはいえ、頑張ったことで得た達成感は何よりの宝である。自分に足りない部分を痛感することで、自分自身を成長させることができる。大学祭を通してどのような女性になりたいかと考えながら学んだことは、今後の学生たちの糧となるであろう。リーダーの学生はもちろん、すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さを実感したはずである。これから社会人として活躍する学生たちが、自らコミュニケーションをとるように心掛け、自分がどうあるべきか状況判断のできる人材、すなわち「社会に必要とされる人材」として働いていけるようになることが、現代ビジネスコーススタッフの願いである。

Gプロジェクトの成果を後輩に残すために、DVDを制作した。最終的な発表の場面だけではなく、そこに至る過程を客観的に記録することにより、このプロジェクトが将来的な価値を有することになる。デジタルアーカイブには、未来への可能性が秘められている。

我々のプロジェクトの最終目的は、「コミュニケーション力」、「プロデュース力」、そして「グループ力」というトリプルパワーをリフレッシュさせ、学生一人ひとりの人間性を総合的に向上させることである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けられなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。